

平成 19 年度

卒業論文

現代トルコにおける女性のスカーフ着用
ーミッリエット紙世論調査結果からー

指導教員 林佳世子

南・西アジア課程 トルコ語専攻

学籍番号 8504013

古瀬由加里

はじめに	2
第一章 トルコのスカーフ問題	3
第二章 トルコの人々のスカーフに対する意識	5
第一節 2003年調査	5
(1) 調査方法—A&G社 (http://www.agarastirma.com.tr/) による調査	5
(2) 調査結果	6
第二節 2007年調査	12
(1) 調査方法—KONDA社 (http://www.konda.com.tr/) による調査	12
(2) 調査結果	12
第三節 2003年調査と2007年調査の比較	22
第三章 スカーフをかぶる人の事例	25
(1) アイギュルの事例	25
(2) エリフの事例	27
(3) ゼイネプ、メルイエム、セリンの事例	28
(4) ある匿名女性の事例	31
(5) ゼフラ・サンボアの事例	32
おわりに	34
参考文献	36

はじめに

現代のトルコにおいて、スカーフをかぶり出歩く女性の姿を様々な場所で見かけることができる。しかし今日、トルコでは、そのスカーフが社会問題を引き起こす原因となっている。

国民の99%がムスリムであるトルコでこのような問題が起こるのは、トルコが1923年の共和国建国以来、世俗主義と近代化・西欧化を国是として掲げてきていることに起因する。トルコ共和国建国の父ムスタファ・ケマルは、イスラームは近代化の妨げになると考え、脱イスラームによってトルコ共和国を発展させようとした。しかし、民衆は、ケマルの思惑とは異なり、イスラームを捨てることはなく、とくに経済的に苦しい生活を強いられた貧困層は再びイスラーム的心情へとかたむくこととなった。一方、近年ではイスラーム色の強い政党が政権を握るようになったが、これはイスラーム的価値観を重視する地方出身者が経済的余裕をもちはじめたことの現れであると思われる。かれらは公的空間でのイスラーム的シンボルの利用を容認する政策を主張している。もはや、イスラームが公的空間に「侵入」することを阻止できない状況になってきているのだ。その象徴がスカーフであり、このため近年トルコでは、スカーフ問題が宗教と政治の焦点となっている。

それでは、トルコでスカーフをしている人はどういう人たちで、この問題についてどう考えているのだろうか。本稿では、その点を明らかにしていきたい。本稿では、第一章でトルコにおけるスカーフ問題について概観し、第二章・第三章ではトルコ共和国で発行されている新聞ミツリエット紙が2003年・2007年におこなった調査・インタビューをまとめ、そこから現代のトルコの女性とスカーフの現状がどのようなものであるかについて検討していきたい。

第一章 トルコのスカーフ問題¹

トルコの初代大統領ケマル・アタテュルクは、オスマン帝国末期から徐々にすすめられていた西洋化による近代化路線の動きを推し進め、政治・教育から宗教色をなくすなどの改革をおこなった。共和国の初の憲法は、フランスの憲法を参考につくられた。それから数度の改訂を経て、またアタテュルクの原則を更に強調しながら 1982 年に制定された現行憲法前文には、「トルコ国民の利益やトルコの存続、国家と国土の不可分性の原則、トルコ民族の歴史的、精神的価値観、アタテュルクの国民主義と原則、改革、文明主義に反するいかなる思想も擁護されず、世俗主義の原則に準じて、神聖なる宗教的感情を国事行為および政治に決して関わらせてはならない。」²とあり、国家と宗教の分離を定めている。この原則に従い 1925 年には公務員の装いに関する規定が出され、公務員は近代化のモデルとなる服装と外見を要求されることになった。世俗主義の確立と近代化を進めるなかで、アタテュルクは女性の地位向上にも重点を置いた。アタテュルクはスカーフをイスラームによる女性の抑圧の象徴とし、スカーフをはずすことによって女性も社会進出をすることができ、近代化の方向へ前進することができる考えたのである。事実、都市の富裕層の女性たちは、教育統一法（1924）によって教育の機会を得て、あらゆる職業に進出し、婦人参政権の実現（1934）により女性国会議員も誕生した。彼女たちは、当然ながら、スカーフをかぶらないという選択をしていた。ケマル自身が、スカーフとは後進的なもので近代化がすすめば女性たちも自らスカーフをはずしていくと考えており、彼に従う人々もそう信じて疑わなかった。しかしながら、近代化の波がひろがったのは都市部の富裕層の女性たちという限られた範囲だけで、貧困層や地方の住民の間でのイスラーム的な慣行はすたれることなく、スカーフの着用も広く続いていた。このような人々の間で 80 年代以降、イスラーム復興が一種のブームとなる。近代化により富裕層と貧困層の格差はますます広がりを見せるなか、国民が世直しの改革をイスラームに求めるようになったためである。また、富裕層から貧困層への富の再配分という弱者救済を掲げたイスラーム主義政党が大きな支持を集めるようになり、建国以来徹底した世俗主義を掲げてきた共和国は、その足元を危う

¹ トルコのスカーフ問題については、以下の文献を参照した。内藤正典＝坂口正二郎 編著

『神の法vs. 人の法ースカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』（日本評論社、2007 年）2～25 頁, 237～271 頁

² 澤江史子訳 トルコ共和国憲法 3 頁

http://www.jiia.or.jp/pdf/global_issues/h12_kenpo/07turkey.pdf （2008 年 1 月 8 日 閲覧）

くされる状況となった。

イスラーム復興とともにひろまっていったスカーフがより大きな問題として取り上げられるようになったのは、1982年にYÖK（高等教育審議会）が大学の講義棟でのスカーフ着用禁止の通達を出したことに反対する女子学生が抗議行動をおこしたことに始まる。なぜ大学でスカーフを着用禁止にしようという動きがあったか。それは、教育を受けた女性が頭部を覆うということが、世俗主義勢力には、世俗主義の共和国の原理に反する国家への挑戦と見えたのである。またスカーフは、教育現場だけでなく政治の場でも問題となった。スカーフを着用した女性議員が登場したことや、政治家の妻たちがスカーフを着用して公に姿を現したことも、世論に大きな波紋を呼んだ。

世俗主義を支持するひとびとにとって、スカーフという存在は世俗主義に反対するものという考えは強く意識されている。スカーフに対する意識が厳しいままのトルコで、それでもスカーフを着用する女性が増え、社会問題となっている。それでは、スカーフを着用する女性たちは何を考え、どうしてスカーフを着用するのだろうか。この関心から行われた調査の結果が、2003年と2007年にミッリエット紙に掲載されている。次章では、その記事を紹介し、スカーフ問題について考察していきたい。

第二章 トルコの人々のスカーフに対する意識

2003年にはA&G社、2007年にはKONDA社が請け負ったスカーフ問題についての世論調査の結果がミッリエット紙で2003年と2007年に連載された。本章で利用するのは、インターネット版に掲載された、同連載である。

第一節 2003年調査³

(1) 調査方法—A&G社 (<http://www.agarastirma.com.tr/>) による調査

調査は2003年5月3-5日のあいだ、トルコの7地方で、38県128郡の157の町と村でおこなわれた。18歳以上の有権者人口を代表する927人の女性回答者を含んだ合計1881人に、「屋内での対面方式によるインタビュー」方式でおこなわれた。

回答者の選択にあたっては、層化2段無作為抽出法⁴とよばれる方法が用いられた。面接調査者の決定では、性別分布と年齢分布への配慮がなされている。

調査は38県で実施され、調査結果はコンピュータ・プログラムなどを用いて、劣性データが混入しないよう監督された。調査に反映できなかったデータはプラスマイナス2%と算定されている。

トルコの7地方でおこなわれた調査の対象となった38の県は次のとおりである：アダナ、アドゥヤマン、アンカラ、アンタルヤ、アイドゥン、バルケシル、ブルサ、チョルム、デニズリ、ディヤルバクル、エディルネ、エラズー、エルズルム、エスキシェヒル、ガズリアンテプ、ギレスン、ハタイ、イチェル、イスタンブル、イズミル、カラビュック、カスタモヌ、カイセリ、クルクラレリ、コジャエリ、コンヤ、マラティヤ、マニサ。カフラマンマラシュ、ネヴシェヒル、オスマニエ、リゼ、サカリヤ、サムスン、スイヴァス、トラブゾン、ウシャク、ヴァン

³ 出典 ミッリエット紙 2007年5月27日 <http://www.milliyet.com/2003/05/27/guncel/agun.html>

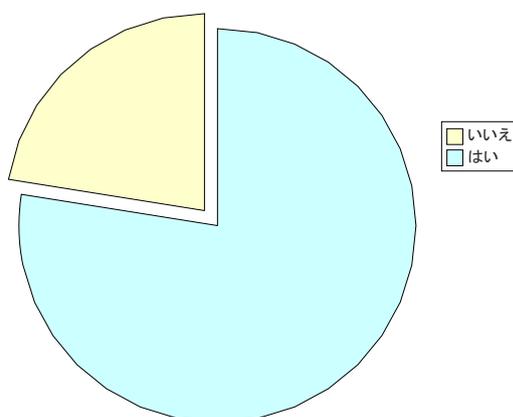
ミッリエット紙 2007年5月28日 <http://www.milliyet.com/2003/05/28/guncel/agun.html>

⁴ 層化二段無作為抽出法とは、行政単位と地域によって県内をブロックごとに分類し（層化）、各層に調査地点を人口に応じて比例配分し、国勢調査における調査区域及び住民基本台帳を利用して（二段）、各地点ごとに一定数のサンプル抽出を行うものである。

(2) 調査結果

調査項目①：質問「身内に、働きにでるとき、買い物、散歩へ行くとき等外出する際にスカーフをかぶる人はいるか？」への回答

はい：77.2%　　いいえ：22.8%



調査項目②：質問「あなた、配偶者、あなたの母、あるいは祖母が頭部を覆うために使う、覆うもの (örtü) をなんと分類するか？」への回答

バシュオルトウス (baş örtüsü) ⁵ / エシャルプ (eşarp) ⁶ : 77.6%　ヨレセルオルトゥ (yöresel örtü) ⁷ : 15.1%　トウルバン (türban) ⁸ : 5.4%　チャルシャフ (çarşaf) ⁹ : 1.9%

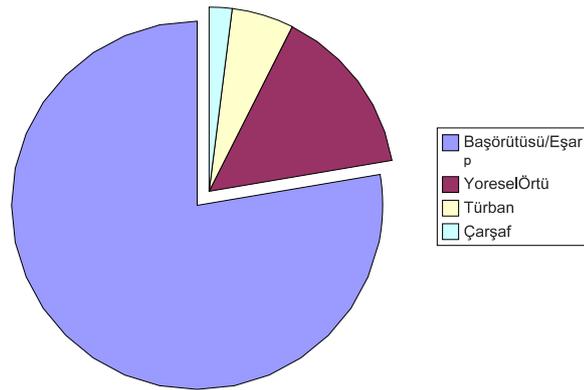
⁵ 頭部、特に頭髪の部分を覆い隠す布、あるいは衣服のこと。注5、8、9については参考文献の頁に例となる写真を載せた。

⁶ 通常、柄付きの、スカーフ一般を指す

⁷ 地方ごとの、伝統的な衣装としての被り物

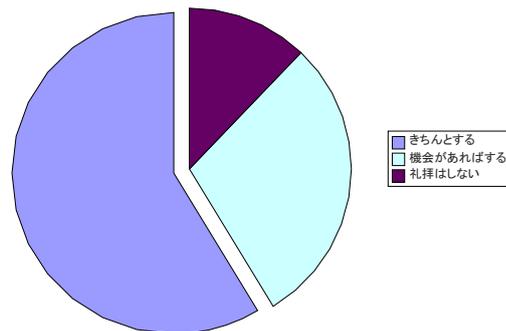
⁸ バシュオルトウスの一部で、都市部の、若く、教育をうけた女性が意識的に、またファッション性をもって着用する。1980年代から増加した

⁹ 女性の頭部からつま先までを覆い隠すための外套で、身体の線があらわにならないデザインとなっている



調査項目③：質問「礼拝をするか？」への回答

きちんとする：58.6% 機会があればする：29.3% 礼拝はしない：12.1%



調査項目④：回答者の社会的ステータスとスカーフ着用の相関関係

Y 座標はステータスランク A>B>C1>C2>D>E

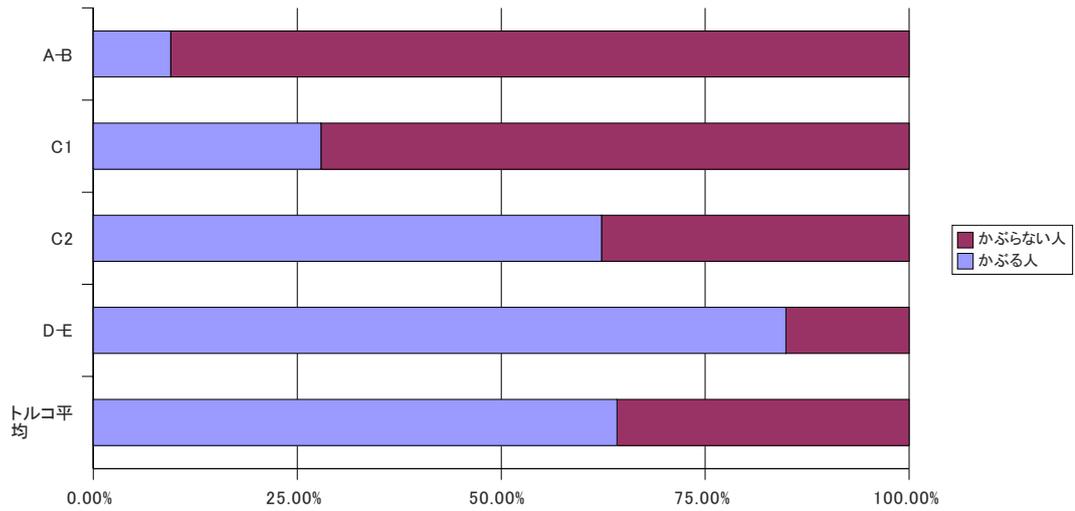
ステータス A-B 着用している人：9.5% 着用していない人：90.5%

C1 27.9% / 72.1%

C2 62.3% / 37.7%

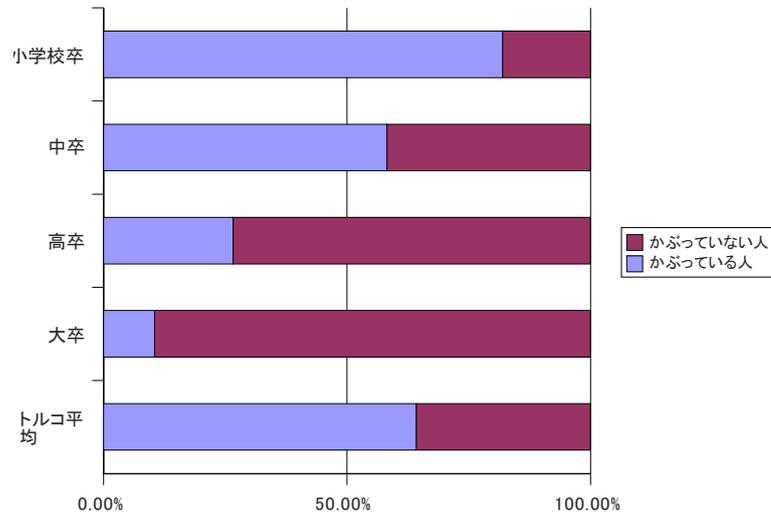
D-E 84.9% / 15.1%

トルコ平均 64.2% / 35.8%



調査項目⑤：回答者の教育程度とスカーフ着用の相関関係

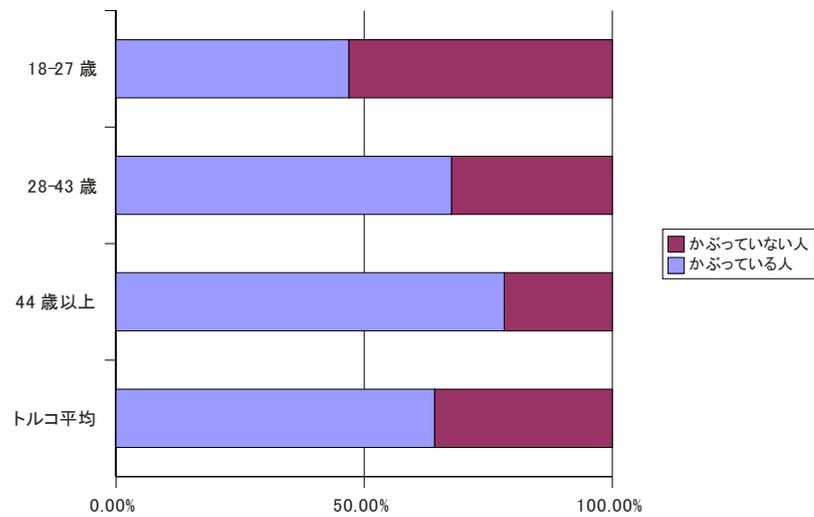
教育を受けていない人	着用している人 : 91.5%	着用していない人 : 8.5%
小学校卒	84.4%	18.6%
中学校卒	58.2%	41.8%
高校卒	26.6%	73.4%
大学卒	10.5%	89.5%
トルコ平均	64.2%	35.8%



調査項目⑥：回答者の年齢とスカーフ着用の相関関係

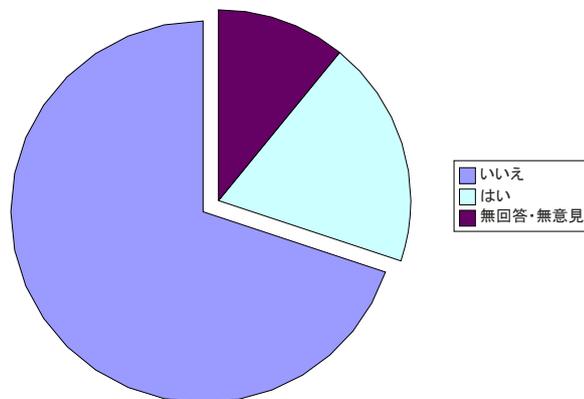
18-27 歳	着用している人 : 46.9%	着用していない人 : 53.1%
28-43 歳	67.6%	32.4%

44 歳以上 78.2% / 21.8%
 トルコ平均 64.2% / 35.8%



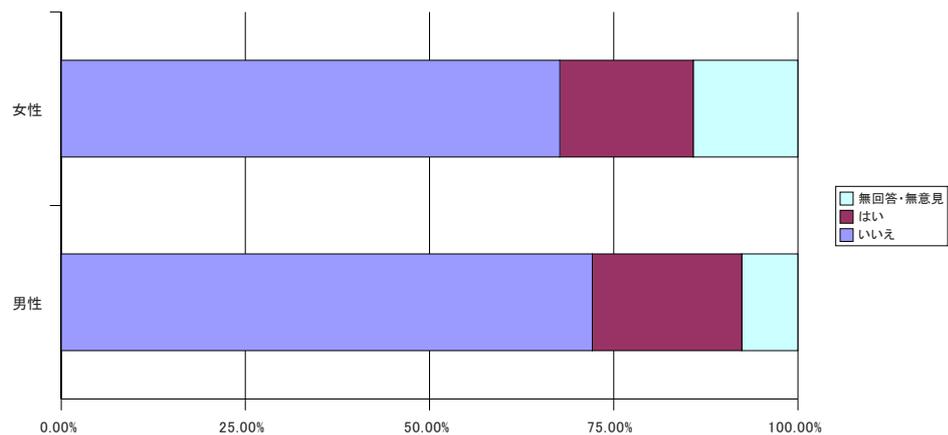
調査項目⑦：質問「トウルバンは反世俗主義の象徴か？」への回答

いいえ、象徴ではない：70% はい、象徴です：19.2% 無回答・無意見：10.8%



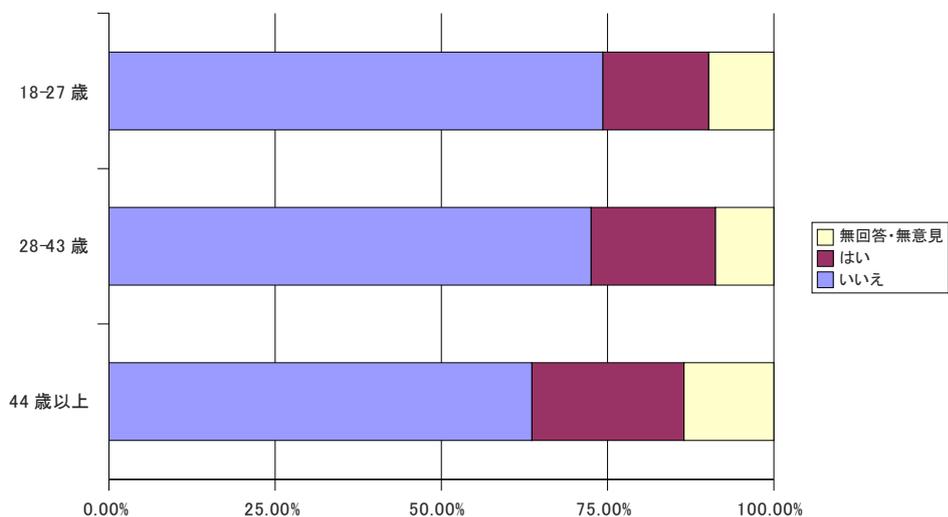
性別と調査項目⑦結果の相関関係

女性 いいえ：67.7% はい：18.1% 無回答：14.2%
 男性 いいえ：72.1% はい：20.3% 無回答：7.6%



年齢と調査項目⑦結果の相関関係

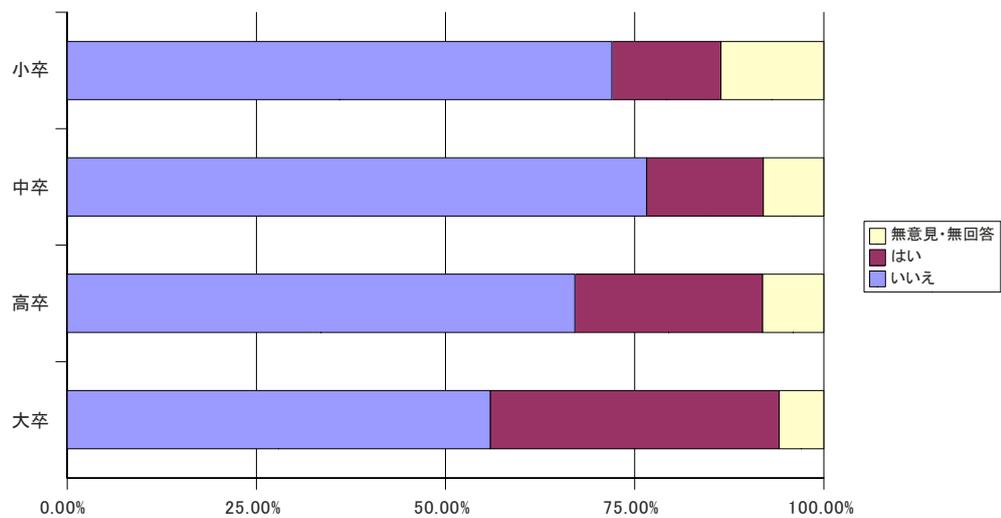
18-27 歳	いいえ : 74.2%	はい : 15.9%	無回答 : 9.8%
28-43 歳	いいえ : 72.5%	はい : 18.7%	無回答 : 8.8%
44 歳以上	いいえ : 63.6%	はい : 22.9%	無回答 : 13.5%



教育程度と調査項目⑦結果の相関関係

小学校卒	いいえ : 72.0%	はい : 14.4%	無回答 : 13.6%
中学校卒	いいえ : 76.5%	はい : 15.4%	無回答 : 8.0%
高校卒	いいえ : 67.1%	はい : 24.8%	無回答 : 8.1%

大学卒 いいえ : 55.9% はい : 38.2% 無回答 : 5.9%



調査項目⑧：質問「スカーフを着用する理由とはなにか？」への回答

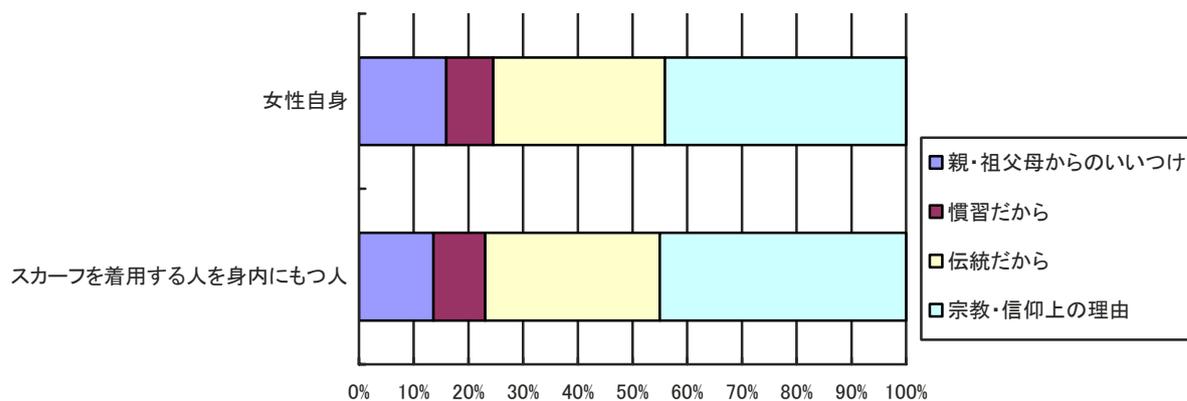
宗教・信仰上の必要性から

女性回答者：63.4% かぶるひとを身内にもつ回答者：61.6%

伝統だから 19.2% / 22.3%

慣習 13.3% / 12.0%

親などの言いつけ 4.1% / 4.1



第二節 2007年調査¹⁰

(1) 調査方法—KONDA 社 (<http://www.konda.com.tr/>) による調査

2007年の調査は9月8-9日に、41県171郡、298の町と村を対象に行われた。18歳以上の2,639人の女性回答者と2,650人の男性回答者、計5,289人を対象に行われた。

調査対象は、2000年度人口統計表と2002年度選挙結果(2002 Genel Seçim sonuçları)を参照し、人口の国内分布に対応する形で、無作為に選ばれた。調査エリアは、TÜİK(トルコ統計機構)の設定した12の地域から選ばれた。

対象地域は以下の通りである。

イスタンブル地方：イスタンブル

西マルマラ地方：バルケシル、エディルネ、テキルダー

エーゲ海地方：デニズリ、イズミル、マニサ

東マルマラ地方：ボル、ブルサ、コジャエリ

西アナトリア地方：アンカラ、カラマン、コンヤ

地中海地方：アダナ、ハタイ、カフラマンマラシュ、メルスィン、オスマニエ

中央アナトリア地方：カイセリ、ネヴシェヒル、シヴァス

西黒海地方：バルトゥン、カラビュック、サムスン、トカト

東黒海地方：ギレスン、リゼ、トラブゾン

北東アナトリア地方：バイブルト、エルズインジャン、エルズルム

中東アナトリア地方：エラズー、マラティヤ、トゥンジェリ、ヴァン

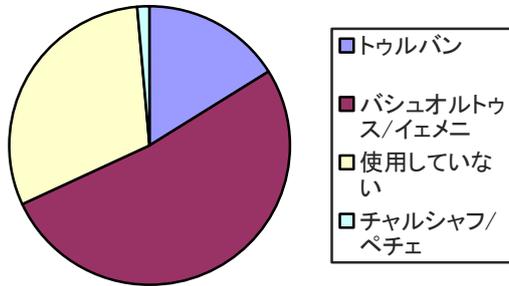
南東アナトリア地方：バトマン、ディヤルバクル、ガズィアンテプ、キリス、マルディン、
シャンルウルファ

(2) 調査結果

¹⁰ 出典 ミツリエット紙 2007年12月3日

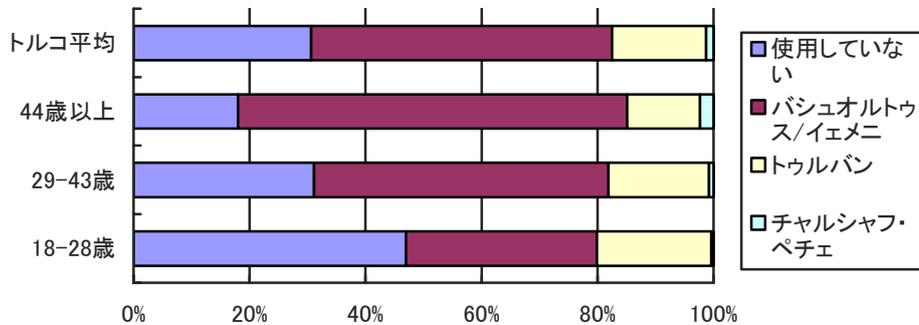
<http://www.milliyet.com.tr/2007/12/03/guncel/agun.html> , ミツリエット紙 2007年12月4日 <http://www.milliyet.com.tr/2007/12/04/guncel/axgun01.html>

調査項目①：質問「頭部を覆い隠しているものをなんと定義するか？」への回答



トウルバン： 16.2%
 バシュオルトウス / イエメニ： 51.9%
 頭部を覆っていない： 30.6%
 チャルシャフ / ペチェ： 1.3%

調査項目②：年齢と調査項目①結果の相関関係



トルコ平均

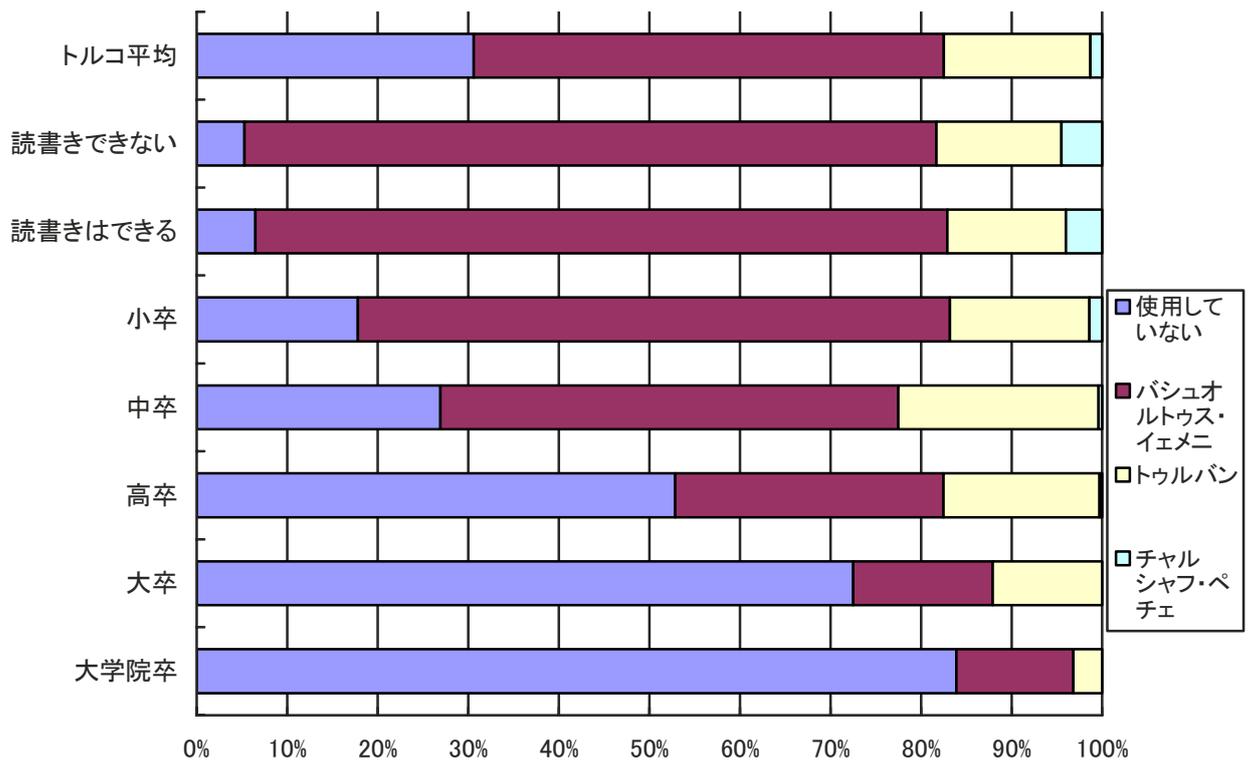
使用していない：30.6% / バシュオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

44歳以上 18.0% / 67.1% / 12.6% / 2.3%

29-43歳 31.1% / 50.8% / 17.3% / 0.8%

18-28歳 46.9% / 32.9% / 19.7% / 0.4%

調査項目③：教育程度と調査項目①結果の相関関係

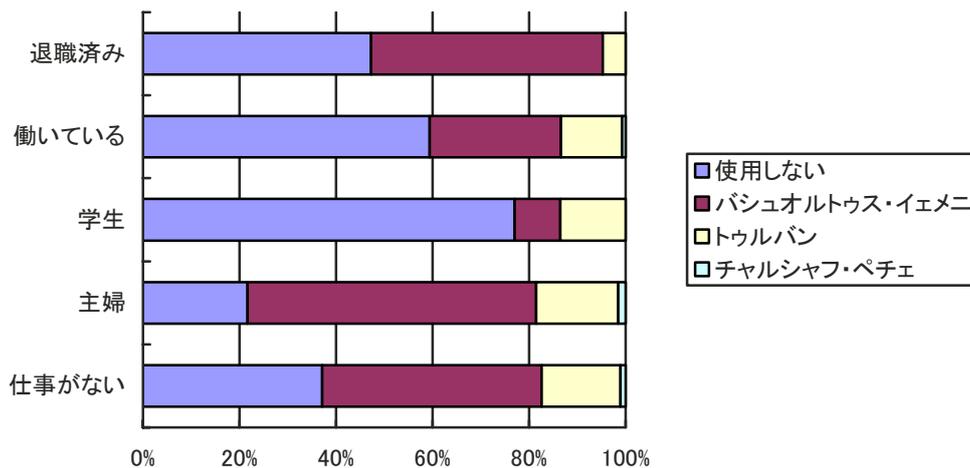


トルコ平均

使用していない：30.6% / バシユオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

読書ができない人々	5.3% / 76.4% / 13.8% / 4.5%
読書はできるが、学校へは行っていない人々	6.5% / 76.4% / 13.1% / 4.0%
小学校を卒業した人々	17.8% / 65.3% / 15.4% / 1.4%
中学校を卒業した人々	26.9% / 50.5% / 22.1% / 0.4%
高校を卒業した人々	52.8% / 29.6% / 17.2% / 0.3%
大学を卒業した人々	72.5% / 15.4% / 12.1% / 0%
大学院を卒業した人々	83.9% / 12.9% / 3.2% / 0%

調査項目④：女性の社会進出と調査項目①結果の相関関係



退職した女性

使用していない：47.2% / バシユオルトウス・イエメニ：48.0% / トウルバン：4.7% / チャルシャフ・ペチェ：0%

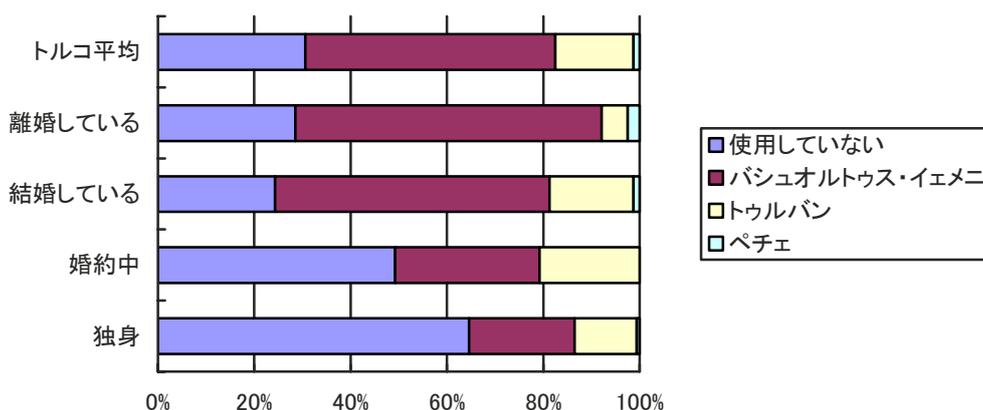
現在働いている女性 59.4% / 27.2% / 12.7% / 0.7%

女学生 77.0% / 9.5% / 13.5% / 0%

主婦 21.7% / 59.8% / 17.0% / 1.5%

仕事のない女性 37.1% / 45.5% / 16.3% / 1.1%

調査項目⑤：結婚と調査項目①結果の相関関係



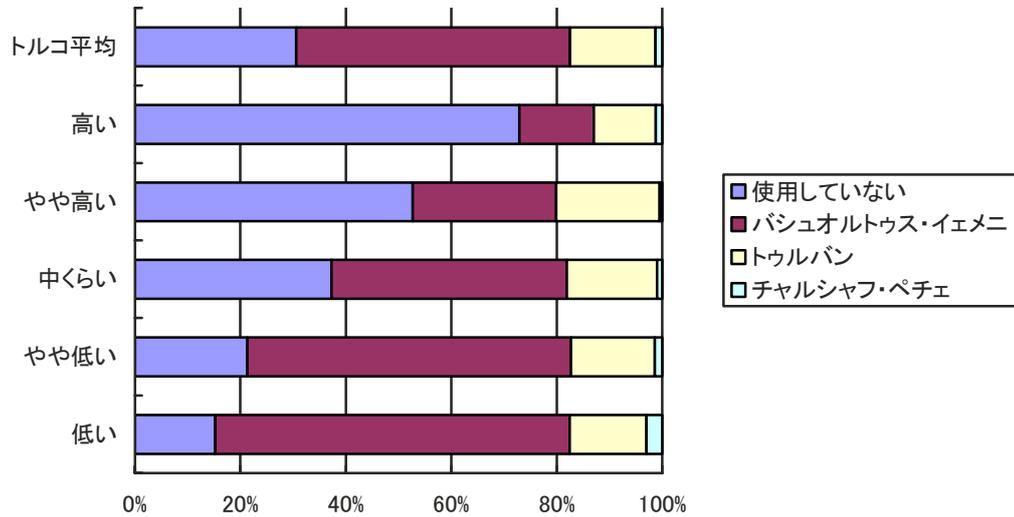
トルコ平均

使用していない：30.6% / バシユオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

離婚した女性 28.5% / 63.6% / 5.4% / 2.5%

結婚している女性	24.3% / 57.0% / 17.4% / 1.3%
婚約中の女性	49.2% / 30.0% / 20.8% / 0%
独身女性	64.6% / 21.9% / 12.9% / 0.6%

調査項目⑥：収入と調査項目①結果の相関関係



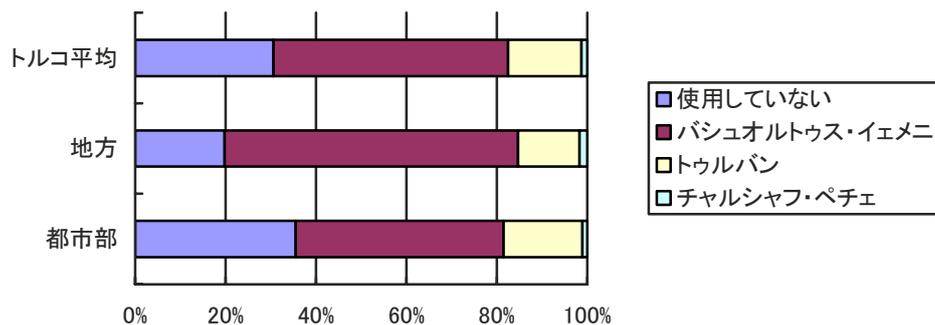
トルコ平均

使用していない：30.6% / バシュオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：

16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

収入が高い	72.9% / 14.1% / 11.8% / 1.2%
やや高い	52.7% / 27.2% / 19.6% / 0.5%
中くらい	37.3% / 44.7% / 17.1% / 1.0%
やや低い	21.3% / 61.4% / 15.9% / 1.4%
収入が低い	15.2% / 67.2% / 14.5% / 3.0%

調査項目⑦：地域と調査項目①結果の相関関係



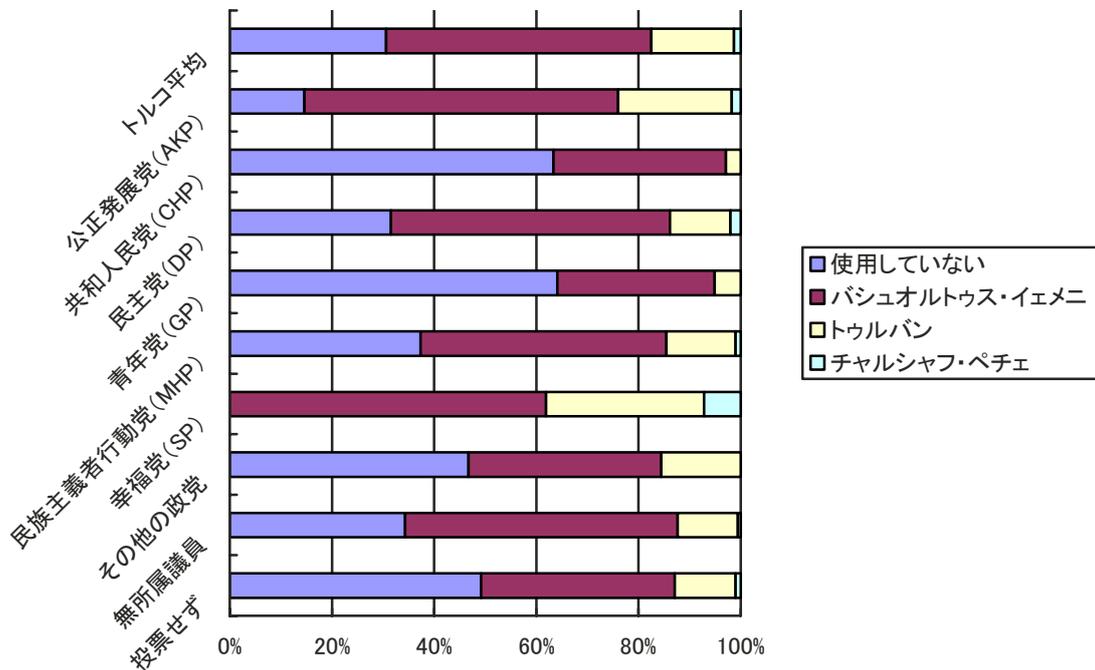
トルコ平均

使用していない：30.6% / バシユオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

地方 19.8% / 64.9% / 13.6% / 1.7%

都市部 35.5% / 46.0% / 17.4% / 1.1%

調査項目⑧：支持政党と調査項目①結果の相関関係



トルコ平均

使用していない：30.6% / バシユオルトウス・イエメニ：51.9% / トウルバン：16.2% / チャルシャフ・ペチェ：1.3%

AKP 14.0% / 58.9% / 21.3% / 1.7%

CHP 59.3% / 31.6% / 2.7% / 0%

DP 29.8% / 51.6% / 11.2% / 1.9%

GP 56.8% / 27.3% / 4.5% / 0%

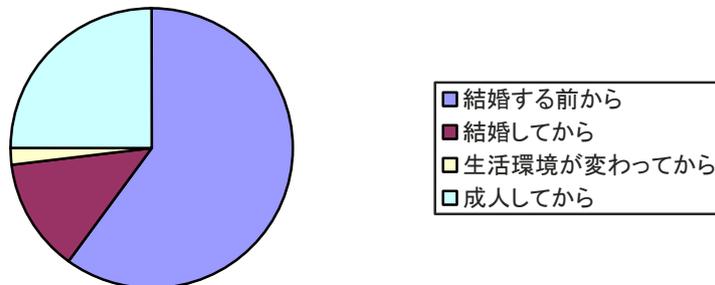
MHP 32.4% / 41.8% / 11.7% / 0.9%

SP 0% / 57.8% / 28.9% / 6.7%

その他の議員 43.8% / 35.4% / 14.6% / 0%

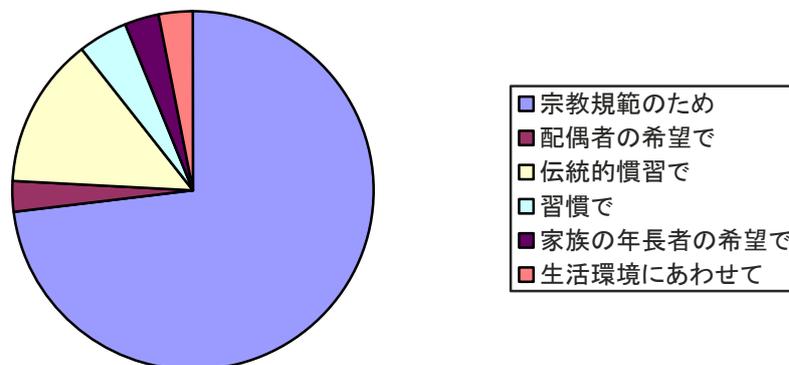
無所属議員	30.3% / 47.1% / 10.4% / 0.5%
投票していない	43.1% / 33.2% / 10.4% / 0.9%

調査項目⑨：スカーフ着用の契機



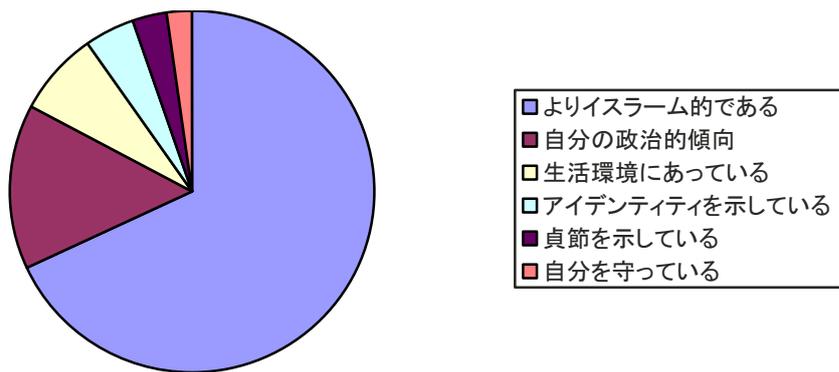
結婚する前から着用していた	59.9%
結婚してから着用するように	13.2%
生活環境が変わってから	1.8%
成人してから	25.0%

調査項目⑩：スカーフ着用の理由



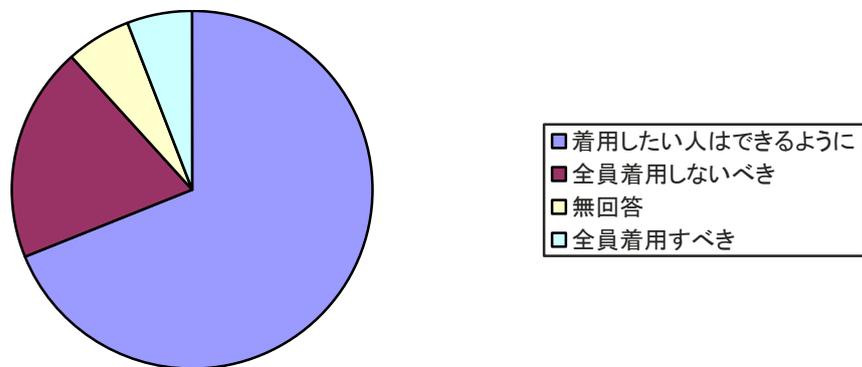
宗教規範	73.0%
配偶者の希望	2.7%
伝統的慣習	13.7%
習慣	4.6%
家族の年長者の希望	2.9%
生活環境	3.1%

調査項目⑪：スカーフのうち、トゥルバン着用の理由



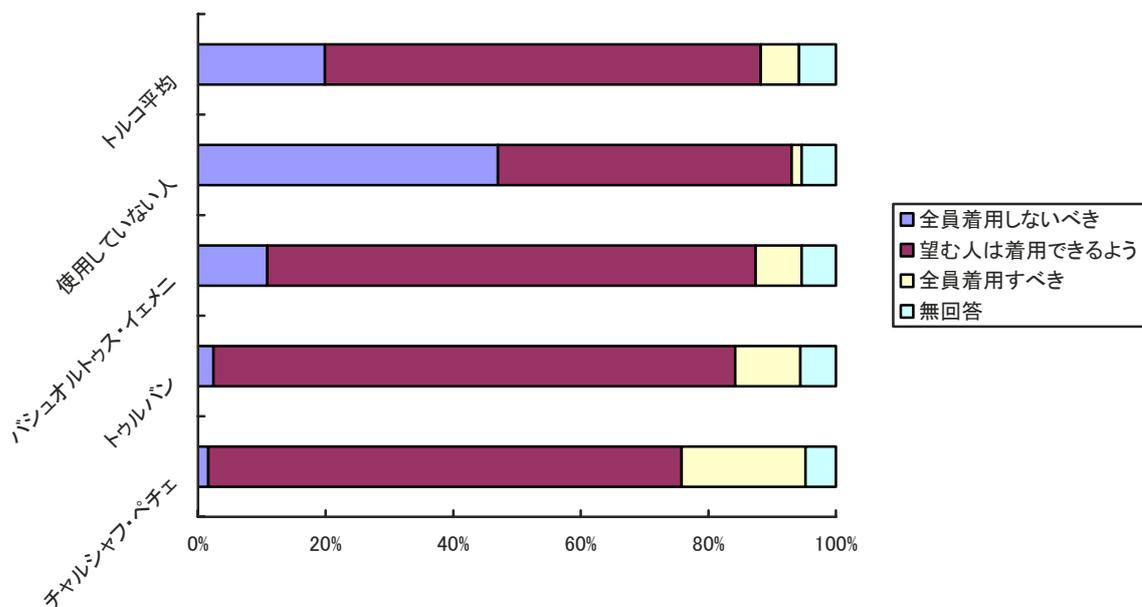
よりイスラーム的であるから	68.0%
自分の政治的傾向を示している	14.9%
生活環境にあっている	7.4%
アイデンティティを示している	4.6%
貞節を示している	3.1%
自分を守っている	2.1%

調査項目⑫：国家公務員のスカーフ着用についての人々の意見



着用したい人は着用できるようにすべき	68.9%
全員着用しないようにすべき	19.4%
無回答	5.9%
全員着用すべき	5.8%

調査項目⑬：調査項目①結果と調査項目⑫結果の相関関係

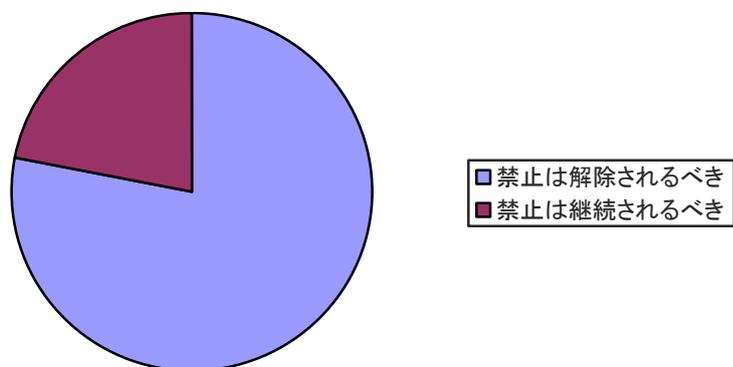


トルコ平均の意見

全員着用しないようすべき：19.9% / 望む人は着用できるようにすべき：68.3% / 全員着用すべき：6.0% / 無回答：5.8%

使用していない人	44.7% / 43.8% / 1.5% / 5.1%
バシュオルトウス・イエメニ	10.7% / 75.3% / 7.1% / 5.3%
トゥルバン	2.4% / 81.8% / 10.2% / 5.6%
チャルシャフ・ペチェ	1.6% / 74.2% / 19.4% / 4.8%

調査項目⑭：大学構内でのスカーフ着用禁止についての人々の意見

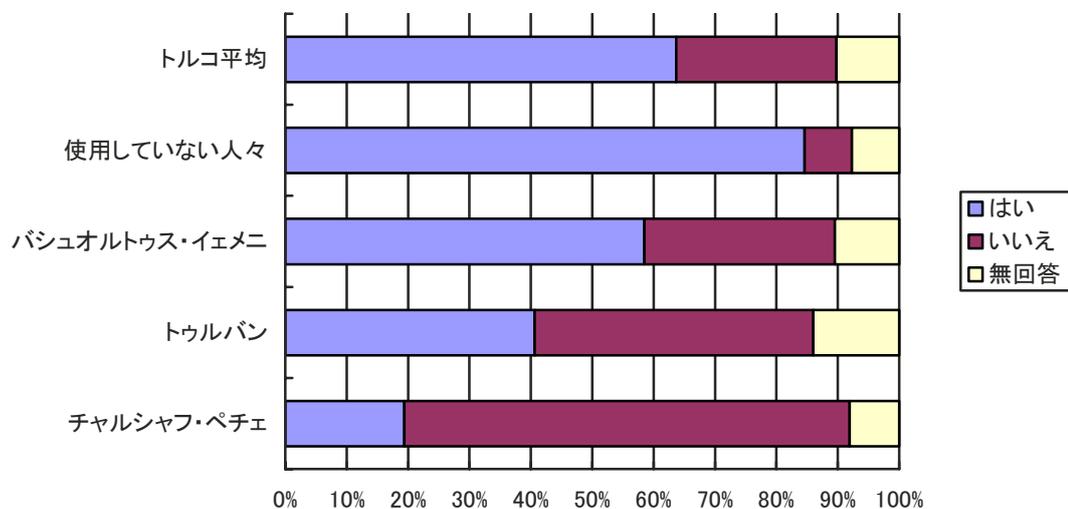


禁止は解除されるべきという意見：78%

禁止は継続されるべきという意見：22%

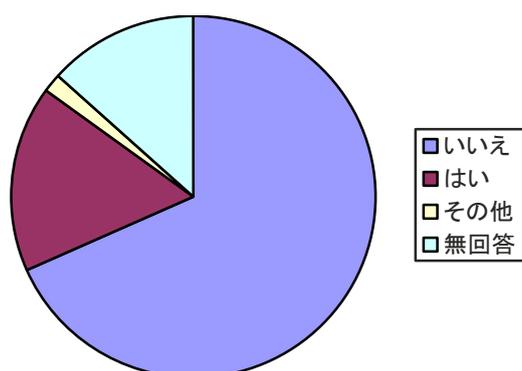
調査項目⑮：質問「大学進学のためにスカーフをはずすことができるか？」への回答と調査項目①結果の相関関係

大学進学のためにスカーフをはずせるかどうか



トルコ平均	はい：63.7% / いいえ：26.1% / 無回答：10.2%
使用していない人	84.6% / 7.7% / 7.7%
バシュオルトウス・イエメニ	58.5% / 31.0% / 10.5%
トゥルバン	40.6% / 45.4% / 14.0%
チャルシャフ・ペチェ	19.4% / 72.6% / 8.1%

調査項目⑯：質問「トゥルバンは反世俗主義の象徴か？」への回答



いいえ、象徴ではない	68.4%
はい、象徴である	16.7%
その他の意見	1.7%
無回答	13.2%

第三節 2003年調査と2007年調査の比較

前2節でみてきたミッリエット紙の2003年調査と2007年調査の結果をふまえ、両者を比較してみたい。

スカーフを着用する人の割合は2003年の64.2%から2007年には69.4%になり、そのうちトウルバンを着用する人の割合は3.5%から16.3%と約4.7倍となった。トウルバンについては、29-43歳の女性のあいだで約4.5倍となっており、年齢が若い人にも広まっている様子がわかる。また学校教育を受けた人についても、トウルバンの着用の増加（大学卒業者においては4.4倍、高校卒業者においては6.9倍、中学卒業者については6.1倍など）の傾向が顕著になった。しかしながら、職業別にみると、スカーフを使用しているのは働く女性の40.6%、退職した女性の52.8%、学生の23%となっていることから、学生でスカーフを着用している人はやはり少数派であることがわかる。居住地域でみると、都市部に居住し、スカーフを着用している人々は、56.3%であったのが64.9%に、地方に居住する人々は75.5%であったのが80.2%に増加している。このうち都市部ではトウルバンを着用する人の増加が、地方ではバシユオルトウスを着用する人の増加がみられた。

しかし、ここで注意しなくてはならない点がある。ミッリエット紙の調査方法では、「あなたの着用しているのは、何か？トウルバンか、バシユオルトウス？」と質問されているが、後述のように、両者の違いは価値判断にもとづくものであり、素材や形態などにより、一義的に決まるものではない点である。このため、ここでの「トウルバンをしている人の割合」についての調査結果は、「トウルバンをしていると自覚している人」の割合として考えなくていけない。スカーフ着用の実態数については、ミッリエット紙が分類したトウルバンとバシユオルトウスを総計して考えるべきである。その場合も、64.2%から69.4%への増加は、注目に値する増加の割合といえるだろう。

スカーフを着用する理由については、2007年の調査において宗教規範だからと答えた人が73%、伝統や習慣と答えた人が13.7%と、2003年調査時と同じ理由で同じような割合が見られる結果となっていることから、これについてはトルコ全体での意識にあまり変化はみられない。国家公務員のスカーフ着用については、2003年の調査で4割近くを占めていた「公務員はスカーフを着用しないようすべき」という意見が大幅に減少し、「公務員はスカーフを着用すべき」という意見が増加したことが目を引く。スカーフを着用する人が増えたことが、この背景にあるのではないかと思われる。スカーフ問題で大きな争点となっている大学構内でのスカー

フ禁止令については、2003年と比べても目立った変化はみられない。やはり禁止は解かれるべきという意見が強いようである。同じように目立った変化がみられなかった意見は、スカーフと世俗主義についての質問への解答で、トルコ国民の7割は、スカーフは反世俗主義の象徴ではないと考えていることがわかる。

さて、この2007年のミッリエット紙の調査は、前述のように、トゥルバンとバシユオルトウスを明確に区別したが、その点については、掲載直後から他紙からの批判にさらされた。以下は、ヒュッリエット紙の2007年12月5日付けの記事をまとめたものある。¹¹ 同紙のコラムニスト アフメット・ハーカンは、トゥルバンとバシユオルトウスという言葉は、非常に曖昧なものだとして、通常考えられている両者の12の相違を記事内で列挙している。

トゥルバン	バシユオルトウス
高い教育を受けた人 若い人 都市部に住む人	教育を受けていない人 年をとった人 田舎に住む人
しっかり布が固定されていて、頭部が見える ことはない	ゆるく巻かれているので、頭部が見え隠れする
母親が着用していると、娘も着用する	母親が着用していても、娘が着用しないことがある
意識をもって着用される	無意識的、つまり伝統や習慣によって着用される
若い世代に、伝統的イメージではなく、現代的イメージをもつものとみなされている	祖母といえる年代の人に多い。伝統的なものというイメージ
新しい問題である	少し古い問題である
着用している人には、なんらかの主張がある	着用している人には特に主張したいことはない
政治的傾向もあらかずのもの	政治とは関係がないもの
宗教に向けた圧力となることもある	年長者からの圧力となることもある

¹¹ 出典 ヒュッリエット紙 2007年12月5日

<http://hurarsiv.hurriyet.com.tr/goster/haber.aspx?id=7812976&yazarid=131>

よりファッション性が高い	ファッション性はあまりない
着用の仕方がむずかしい	着用の仕方は簡単
着用の形は何通りも生み出されている	何通りも着用の形を生み出すのには向いていない

こういった特徴があげられている。いずれも、主観により判断さえるものであり、チャルシヤフとの違いのように、色や素材、結び方などで一義的に区別できるものではない。ミツリエット紙はそれぞれの特徴を持つトゥルバンとバシュオルトゥスを区別して調査をおこない結果を出しているが、問題なのは回答者の女性たちの側においては、この区別があやふやとなっている点である。トゥルバンの形で頭部を覆っている女性が「これはバシュオルトゥスです」と答える場合も少なくはなかったと思われる。このように、しっかりとした定義がないものをもととしているだけに、「トゥルバンを着用する人の数」や「バシュオルトゥスを着用する人の数」をはっきり断言してしまうのは混乱のもと、との批判である。

しかし、トゥルバンとバシュオルトゥスの違いが主観的なものであり、トゥルバンには「伝統的ではない、意識的に着用されたスカーフ」という意識があるとすると、「トゥルバンをしている」という女性の数が5.4%から16.2%へ増えていることは、意味のある数字ともいえるだろう。より多角的な比較により、現状を把握する必要があると思われる。

調査結果の比較から、トルコにおけるスカーフに対する風当たりは弱くなってきているのではないかという推測ができる。では実際にスカーフをかぶり生活している女性たちの声はどうなのかを見ていきたいと思う。

第三章 スカーフをかぶる人の事例

同紙のおこなった 2003 年の調査のうち、スカーフについて、女性に対するインタビューをまとめる。これにより、よりミクロなレベルで、スカーフ着用の実態を知ることができると思う。

(1) アイギュルの事例¹²



アイギュルは 8 歳のときに父からスカーフを着用するよう言いつけられ、それから 14 歳まで、自分の意志ではないスカーフ着用を続けていた。いったんはスカーフを脱ぎ捨てたものの、18 歳のときに結婚して夫の希望で再びスカーフを着用することになった。しかしながら、スカーフを着用したくないという気持ちを理解してくれた夫のおかげで、彼女は現在スカーフを脱ぎ、大学進学を考えている。

—お父さんはどうしてあなたがテセツェルを着ることを望んだのでしょうか？

父のエディップ・ドルは、イウーディルからイスタンブルに移住してきた、裕福な家系の人でした。権威主義者でしたが、ムスリムとしてはあまり敬虔ではないほうでした。母が水着姿をしている写真でさえ見たことがあります。1970 年代はまあ、中間でした。この（イスラーム回帰の）流行が新しく始まりました。ある日父が家へ帰ってきて、「皆スカーフを被りなさい」と言ったんです。

—小さいときにトゥルバンルとなったのはどうでしたか？

恥ずかしかった・・・他の子供たちを羨ましく思いながら育ちました。なぜなら彼らは子供で、子供の服装をしていて、私も子供だったけれど女性の服装をしていたからです。私は前もって、父がいるときにはスカーフをかぶり、いないときにはかぶっていませんでした。このため父にはよく叩かれました。14 歳のとき、スカーフをはずして通った中学を卒業して、高校へ通おうとしていたときに赤ちゃんができました。けれど、高校の卒業証書も手に入れるつもりです。50 歳になっても、大学へ通いたいと思っています。

—お父さんの最近の態度はどうですか？

父の娘のなかで、ただひとりスカーフをかぶらず、ズボンをはいていたのが私でした。で

¹² 出典 ミッリエット紙 2003 年 5 月 27 日 <http://www.milliyet.com/2003/05/27/guncel/agun.html>

も私をととても愛してくれました。姉たちは父の目を引くために、スカートのしたにパジャマを着ていました。リュトフィエ姉さんとアイヌル姉さんはそう信じてきていたと言っていました。ひとりは亡くなってしまいました。他の姉はというと、トゥルバンを脱ぎました。けれど父が亡くなって、夫とも離婚した姉もそのようにトゥルバンをとりました。それを、歳をとって4人の子供の母となったときにやったのです。ミニスカートや短パンをはくようになりました。今は、彼女はスカーフをかぶっていませんが、彼女の娘たちはかぶっています。

—しかし、あなたはなぜスカーフをしたくないと思っていたのですか。

結婚したとき、夫は私がスカーフをかぶることを望みました。夫のことをとても愛していたので、1年間はスカーフをかぶっていたんです。けれど、私の愛する人々、夫、父に正直になりたいのです。私が好きではないことをやらせないでほしいのです。このことについては、自分で決めさせてほしい。夫はよい宗教教育を受けていました、このためトゥルバンに関する決定を私の選択に任せてくれました。私はトゥルバンを脱ぎました。しかし、私は宗教に対する信仰心を持っている女性です。アッラーを心から信じています。

—お姉さんたちは反対しませんでしたか？

母はファーティフ地区で、教団がはびこり始めた頃、ある日、コート姿でかけていったのに、チャルシャフを着て帰ってきた。父はそれをみて「誰にそそのかされたんだ」と怒ってしまった。「このうそつき」といって、チャルシャフを引き裂いて投げやってしまった。母は「地獄の業火で永遠に焼かれてしまう」と恐れていた。トゥルバンで私たちを何年も服従させてきた父は、チャルシャフのせいで母と一緒に出歩かなくなった。

—あなたの周りでスカーフをしているひとたちは、ただ服従のためにしているのですか？

私はそうは思いません。多くの若い女性は自分の独立した意志によってかぶっているのだと思います。恩恵を得るためにしている人も、確かなイデオロギーのためにしている人も、宗教を広めるためにしている人もいると思います。しかしこういう人々はごく少数だと思います・・・

このように、アイギュルの事例は、自分の意志でスカーフを脱いだ女性の例である。彼女は父や夫の意志でスカーフをかぶっていたものの、スカーフについて「恥ずかしい」「好きではない」という発言をしていた。スカーフそのものについては否定的であるものの、信仰心は強いことから、彼女は、髪を隠しさえすれば立派なムスリムだとは考えない、新しいタイプの自覚的なムスリム女性ともいえよう。

(2) エリフの事例¹³



エリフ・チャカルは出版業界で編集者として働いている。彼女の働く環境では男性と会う機会が多いため、妻としての貞節をあらわす目的で、またファッションとして、スカーフの着用をみずからおこなっている。

—頭を覆い隠しているのはイスラームのためですか？

私のしているトゥルバンはバシュオルトゥスではありません。イスラーム的なものなのか、そうでないのかわかりません。ファトワーを与えてくれる人もいません。私は自分自身にこれが似合っていると思うからやっています。鏡に映る自分が美人だと思えるのです。

—バシュオルトゥスを着てはいらっしゃいますが、ご自身では違うと思っっているのですね。人々はあなたを困惑させたりしませんか？

仕事の関係で、どこにでも出入りします。人は私をみて驚くけれど、それは、私のことを知らないせいです。スカーフをしていたって、遊んだり、働いたり、人生観そのものに、なんの影響もない。ただ、髪にスカーフをしているだけで、頭の中身を覆っているわけじゃあないので。

—繁華街での遊びを楽しみますか？

もちろんです。

—何歳からスカーフを？

14歳からバシュオルトゥスを着ています。ただ、父に言われたからというわけではありません。

—バシュオルトゥスをする人でいることは簡単ですか、難しいですか？

どちらとも言えます・・・ヒュリヤー誌に、本の紹介でいったことがあります。女優のヒュリヤー・アヴシャルと会って、仲良く話をしました。ジェム・オゼルさんのTV番組にも出ましたが、番組制作者の方は電話ではとても誠実に話していらっしゃいました。ただ、私に会ったときの彼の顔をもう一度みたいとは思いません。

¹³ 出典 ミッリエット紙 2003年6月2日

<http://www.milliyet.com/2003/06/02/guncel/gun02.html>

—では、この身軽な振る舞いについて、イスラーム的な人たちから反発されるということはありませんか？

反応があるというのは素敵なことです。本気で考えてもらえてるということですから。コラムニスト アイシェ・アルマンのコラムに、ウルダーでとった写真がのったときには、結構、あれこれいわれました。間違っている、ともいわれました。でも、私は普通の人間です。バシユオルトゥスの代表者なんかじゃありません。

—大学でバシユオルトゥスは禁止されるべきですか？

大学へは入学出来ませんでした。「スカーフをとって勉強しなさい」と言われたからではありません。バシユオルトゥスがないと、自分が美しく思えないのです。同性愛、無神論が普通に受け止められるとしたら、バシユオルトゥスも普通だと受け止められるべきです。私は、私ではない他の女性となることは望んでいません。

エリフの事例は、イスラームへの信心は薄く、スカーフはむしろファッションの一部ととらえているものであるといえる。ただ大抵の人はそれをファッションではなくイスラーム的なものと解釈してしまうため、世間との感覚の差異が生じることが不便ともいえる。文中でエリフが述べていたように、スカーフをあらわすトルコ語が「トゥルバン」「バシユオルトゥス」など複数あるのに対し、それひと混ぜにして論争の中に問題を置くことはあまりよくないように思われる。

(3) ゼイネプ、メルイェム、セリンの事例¹⁴



ゼイネプ、メルイェム、セリンの三人はボアジチ大学に通う女子学生である。ゼイネプ、メルイェムはスカーフを着用していて、セリンは着用していない。セリンはスカーフに対してあまりよいイメージを抱いていなかったが、二人と知り合ったことで考えが変わったという。

—AKPの人たちの奥さんたちは、ちょっとちがった格好

¹⁴ 出典 ミッリエット紙 2003年6月1日

<http://www.milliyet.com/2003/06/01/guncel/angun.html>

をしていますね。たとえばエミネ・エルドアンとかハイリュンニサ・ギュルは、もっとおしゃれなスカーフ姿 (tesettür) をしています。

Z: 全てのものが変わりゆくように、テセツェルも変わっていきます。スカーフの結び方も変わります。流行です。

—トルコ文化特有のテセツェルの適応ということですか？

Z: それを受け入れる必要があります。トルコはムスリムにとって一番いい生活を送れる土地です。

—いちばんいいという根拠はなんでしょう？

Z: 望んでいる通りに生きられるということです。本当にその状態が守られます。大学へはスカーフをして入れないかもしれませんが、けれど、シャリーアで示されているようなことを要求する、けれどムスリム自身には反対のことをやらせる国があります。トルコには、イスラームが正しいと知っている多くの人があります。

—ムスリムについての正しい理解とはなんでしょう？

Z: イスラームは、平和主義者の宗教です。たとえば、私が友達をつくる時、スカーフをしている、していないで別に扱うことはありません。セリンもスカーフはしていないけれど、3年ものあいだとても仲良くやっているのよ。

S: 私はゼイネブと入学式の日知り合ったの。そのときはうちの家族はみんな、スカーフをかぶっている人をあまりよく思っていないわ。ゼイネブのおかげで私の考えは変わったけれど、今も AKP を支持していないわ。

Z: 私も、AKP に投票しようとは思わないわね。

M: 私も・・・。

—幸福党に投票しましたか？

Z: 今のところは、イスラーム色のある政党には投票してません。

M: 私も、私の家族も同じです。

Z: だって、私たちの代弁者じゃありませんから・・・

—では誰なら代弁者に？

Z: 私にメリットを与えてくれる可能性のあるところですが、私にとっては経済のような形がより重要です。つまり、国をどんな形で導いていくか・・・

—皆さんの家族の方はスカーフは？

Z: 母がかぶっています。

M：かぶっています。母も、父も医者なので。

—他に近しい人で、かぶっていない人はいますか？

Z：母の友人は、かぶっていない人が多くいます。

M：父の友人にはまったくいませんね。母のほうもかぶっている人が多いです。

—公の場で手を繋いだり、キスをする、スカーフをしていないカップルもいますが。

Z：私はそんなことしません。

S：貧民街でそういった光景をみることができます。AKPの次のような演説もあります。

「Biz İslamın burjuva kesimine hitap ediyoruz." (我々はムスリムの中産階級の人々へ演説している)」その人々に、このようなことは起こりません。なぜなら彼らは気付いているからです。下の人々が経済的な利益を手にするためにテセツェルを使っています。

Z：ボーイフレンドのためにスカーフをかぶっている人もいます。これもある種のスカーフの利用です。

S：イスラームでは見せることは禁止です。たとえばブレスレットがあったとしたら、だめよと言って隠します。けれど、見せびらかす人もいます。先日、美人な女の人を見かけました。頭にはスカーフをしているだけで、スカートがどれほどタイトかって、もう目が点になりましたね。あれには、単にバカなのか、そうでなければ、なにか魂胆があるとしか思えませんね。宗教のおかげで必ず仲良くなれるわけではないのです。

Z：一番重要なのは、美の道徳です。礼拝をし、人の仲を裂くことをしない。美德が完璧であってさえ、人はしっかりと精進しなければならないのです。

—若者のあいだで、セックスはどうなっていますか？

Z：セックスは結婚してからのことだと私は考えてます。

—では恋愛関係についてどう思いますか？

Z：ボーイフレンドはいるけれども、恋人はいません。

M：私も恋人はいません。けど、いい人がいたら、(恋愛が) いけないとは思わないわ。

この三人の事例では、ムスリムの側から見たスカーフについての考えをみることができる。スカーフの巻き方が変わることにたいして問題ではなく、スカーフを免罪符的なものとして利用する女性たちはよくない、と述べている。ムスリムのなかでさえもスカーフについて意見の相違があることが、問題をよりややこしくしているのではないだろうか。

(4) ある匿名女性の事例¹⁵

イスタンブルのファーティフ地区でのインタビュー。非常に「モダン」なスカーフを着用している女性である。

—いつからスカーフをかぶっているのですか？

1989年からです。

—最近、あなたのようにズボンとチュニックを着る人が増えています。どう思われますか？

昔から、スカーフをかぶる人々は、服装については重要視してきませんでした。しかし今は、スカーフをかぶるひと服装を選ぶ時代です。より現代的なものが作られ始めています。以前はそんなことはなかった。そのため、みんな同じつまらないものを着ていたんです。

—お化粧をされていますね。それについて何か言われたいのですか？

一部の人は、もちろん反対しています。たぶん、全然まちがってないということはないんでしょう。でも、人間だったら、やりたいことがあるでしょう。たとえ間違っていたとしても、美しくみせたいから、こうするんです。

—チャルシャフをかぶる人たち、つまり古い考えのスカーフをかぶる人たちからは、どんな反応がありますか？

今、彼女たちのなかでも、服装としてチャルシャフをかぶり、現代的な見方をもつ人たちがいます。これらの人々は、実際には厳しい意見は言いません。しかし、一部の人は、反応をみせます。直接なにかをされた、ということはありませんけれども。

—海水浴をしたことがありますか？

女性だけのビーチならば、あります。

—女性だけのビーチがあるのですか？

サルイェルにビーチがあります。一定の日は、女性限定です。自動車で連れて行ってくれます。

—そこでは普通の水着を着るのですか？

上着を着る人も、ビキニを着る人も、様々です。

—テセツェル水着についてどう思いますか？

¹⁵ 出典 ミリエツ紙 2003年5月30日

<http://www.milliyet.com/2003/05/30/guncel/angun.html>

絶対私には合わないですね。水を感じられないのに海へ入る意味はありません。

彼女の事例については、スカーフなどで隠しどころを隠すべきとしながらも、ファッション性を求める例である。やはり男性の目があるからスカーフをするのであって、女性だけの場所があるならばそこではスカーフは必要ないという考えだが、ファッション性のあるスカーフや化粧は男性の目を引く要因になりかねないので、彼女の考えは一部理解されにくいこともあるようだ。

(5) ゼフラ・サンボアの事例¹⁶



ゼフラ・サンボアは、コーランに則って頭部だけでなく身体も、線がわからないような服装をしていた。目を引いたのは、スカートの下にズボンをはいていたことだ。

—とてもおしゃれですね。これは新しい流行ですか？

私は流行だとは思っていません。なぜなら、何年もこのような格好をしているからです。

—どんなふうに、変だと見られたことがありますか？

「スカーフをかぶっているけれど、どうしてズボンをはいているの？」と、服装について批判されたりします。風がふくと、スカートはめくれあがったりまとわりついたりして、体の線をあらわにします。ズボンはより快適

で、加えて隠す必要のあるところを隠してくれます。この形も、とても快適なんです。

—どれくらいのあいだ、スカーフをかぶっているのですか？

7年です。

—働いていらっしゃいますか？

働き始めようと思っています。アラビア語の先生の職です。

—テセツェルの流行が増加しています。現代化しているでしょうか？

—一部の人にとっては現代化でしょう。私はこの格好がとても快適です。6年間この服装をしています。実際にはこの着方が間違っていることも知っています。知っているけれども、快

¹⁶ 出典 ミリエツ紙 2003年5月29日

<http://www.milliyet.com/2003/05/29/guncel/agun.html>

適なんです。

—つまり、間違っているけれどももしている、とおっしゃるのですね。

結局は、私が適切かどうかを言っているわけではないのです。あなた方も御覧になっているように、いくつかの特徴があります。（靴下をはかず、サンダルをはいているという）しかし、できるのはこれだけです。神が我々を許してくださるといいのだけれど。でも、一部の人は本当に変です。「女性はズボンをはいてはならない。預言者に対する冒涇だ」と言うんです。私にしてみれば、これは間違っています。これについては、個々人の考え方があると思います。私はこの服装がよいと思うからこそ、この服装を続けています。誰かになりたいと思うからとか、流行だからとかいう理由ではありません。もし流行だとすれば、その流行は私が始めさせたと断言できます。人々の中には、チャルシャフをかぶるひともいるし、パルドスをかぶるひともいます。私たちのことを、宗教を誤った方法に向けていると考えている人たちがいます。でも、神が私にこう考えさせているのですから、間違っているはずがありません。そんなことは、着るものと何の関係もありません。

—AKP 政権をどう評価しますか？

私にとっては、とても素晴らしいです。人々がこれほどの年月のあいだ、ひとつの形を押し進めてきたのですから。タイIPP・エルドアン政権がすべてを変える事を期待していました。そして時が来て、タイIPP氏と出会いました。とても素晴らしい人です。

ゼフラ・サンボアの事例は、自分がよかれと思っている服装が理解されない例であるといえる。スカーフにはスカートをあわせるものという考えが一般的であったため、彼女がよりイスラームの規範にかなっていると思うズボンでも理解されないことが多いようだ。スカーフを重視する人々の意見が彼女の発言からわかるが、その人々の考え方が少々柔軟性に欠けるものであることが伺える。

おわりに

第二章、第三章から、スカーフをかぶるという人の数は全体から見て少ない側になるものの、4年間でその数は増加しており、特に都市部の人々や若い人々のあいだでトゥルバンという新しいスカーフが着用されるようになってきていることがわかる。バシュオルトゥスについては信仰心のほかに、生活習慣や文化に根付く伝統的なものだからという理由でかぶっている人が多くみられるが、トゥルバンについては、バシュオルトゥスよりもイスラームの教えにかなっていることや、政治にかかわる理由で着用されていることが注目に値する。

またバシュオルトゥスとトゥルバンについては、地方では伝統的なバシュオルトゥス、都市部ではトゥルバンがかぶられる傾向があることもわかった。これは、都市部においては頭部を覆うことに対する意識が地方部とは違うという事実の現れである。前述したように、イスラームの教えにかなっている、という理由のほかに、政治的傾向を示すものとして着用されている点は、政治の中心に近い都市部ならではの傾向だといえる。また結婚を境にトゥルバンをかぶるようになった、という意見もあり、女性の貞節をあらわすイスラーム的考えが、ある意味伝統的な形でトルコに根付いていると思われる。年齢が高くなるにつれてトゥルバンを着用する割合が増えるのは、年齢の高い人のあいだにより根付いている伝統と、この結婚も要素となっていると考えられる。

また、スカーフをした若い女性に対するインタビューからは、彼女たちが、スカーフについて、それぞれはっきりとした自分の考えをもっていることがみてとれた。彼女たちは、「スカーフはしたくない」「スカーフが好きだからしている」「人にいわれたわけではなく、自分で着用することを決めた」と言っている。一方、宗教に熱心でもスカーフを着用しないという選択をする人もいることも発言されていた。調査結果にみられた、「親や祖父母からのいいつけ」の割合がわずかであったことからわかるように、スカーフは自分で選ぶもの、という意識が広まっているようである。

興味深い結果であった一方、このミツリエット紙の調査に関して他紙から批判がよせられたことも留意しなければならない。第二章で挙げたヒュツリエット紙の記事に続いて、ラディカル紙も2007年12月6日付の記事¹⁷で調査に対する批判の声を上げた。同年に同紙がおこなった調査においては、スカーフの着用者数は減少しているという結果がでていたという。調

¹⁷ ラディカル紙 2007年12月6日 <http://www.radikal.com.tr/haber.php?haberno=240830>

査によっては異なる結果が出るということも考慮して、問題について考えていくべきである。

トゥルバンにしるバシュオルトゥスにしる、自身のスカーフはイスラームの宗教規範であると考え実践している人は、それが世俗主義に反するものであるとは捉えていない。彼女たちの多くにとっては単に宗教規範であるから頭部を覆うものを着用している、というだけで、国家の理念に反発することなどは考えていないのである。逆に、スカーフをしていない、またはイスラームに対してあまり信心のない人々のほうが、スカーフが世俗主義に反するものの象徴であると捉えている傾向が目につく。彼らがスカーフに否定的な意見をいただくのは、彼らを育てた世俗主義が、スカーフによって覆われる可能性があるものだという意識をもっているためであろう。確かにトルコ周辺諸国ではイスラーム復興による国家改革がおこなわれていることからおこる懸念、また世界からのイスラームという宗教そのものに対する偏った否定的な意見という圧力もあるのではないか。

しかし両調査の結果にはっきりと見られる意見である、女性たちは自らの意志でスカーフをかぶっているということを軽視してはならない。大学構内でのスカーフ着用の禁止は、たとえ才があってもスカーフをはずしたくないために教育を受けないことを選択する女性を増やしてしまうことにはならないか。結果的に、トルコが望んでいる女性の社会進出を妨げることになりはしないか。長年の議論があるだけに慎重にならざるをえないが、更に議論をかさねて、スカーフを望む人々も妥協ができるトルコ独自の世俗主義をつくりだしていくことができるのではないだろうか。

今回は特定の新聞社の記事という限られた資料だけでしか分析をおこなうことができなかった。新聞社にも政治的性格や宗教的性格があるため、批判の例として挙げたヒュッリエット紙やラディカル紙に掲載される世論調査との比較や、コラムなどのスカーフに関する報道、または大統領府が扱う世論調査などのより多くの資料をもとにスカーフ問題の検討をすすめることを今後の課題としたい。

参考文献

- 内藤正典＝阪口正二郎 編著『神の法 vs.人の法』日本評論社、2007年
- ミットリエット紙 世論調査に関する記事（Web上）

2003年5月27日 <http://www.milliyet.com/2003/05/27/guncel/agun.html>

2003年5月28日 <http://www.milliyet.com/2003/05/28/guncel/agun.html>

2003年5月29日 <http://www.milliyet.com/2003/05/29/guncel/agun.html>

2003年5月30日 <http://www.milliyet.com/2003/05/30/guncel/agun.html>

2003年6月1日 <http://www.milliyet.com/2003/06/01/guncel/agun.html>

2003年6月2日 <http://www.milliyet.com/2003/06/02/guncel/gun02.html>

- ヒュットリエット紙

2007年12月5日 <http://hurarsiv.hurriyet.com.tr/goster/haber.aspx?id=7812976&yazarid=131>

- ラディカル紙

2007年12月6日 <http://www.radikal.com.tr/haber.php?haberno=240830>

- 注5、8、9の参考写真

注5 バシオルトウス



注8 トウルバン



注9 チャルシャフ

